

いま手渡したいこと

子どもたちに文化を 教師にあこがれと自由を

子どもたちが抱えるつらさや悲しさを深く聴きとり、そのうちに「幸福に生きたい」というねがいを読み取ること、子どもたちが、自らの悲しみを乗り越えていくための糧になるような豊かな文化を手渡すこと、そのためにも、一つひとつの教材を深く吟味し、その文化の「教えるに足る」値打ち＝本質をつかんで、それを手渡すための授業のありようを構想すること…。前回までで述べたこれらのことは、子どもたちの幸福と発達をねがい、自らの仕事がその実現に寄与することをねがってとりくまれてきた大勢の先輩たちの教育実践に学びながら、「教師のしごと」について考えてきた、私自身の思考過程の現時点での「まとめ」にあたります。「教師のしごと」について考えることは、言い換えれば「教師の専門性」を考えることでもあります。障害児教育における「教師の専門性」は、この間大きく揺さぶられてきたように私は感じています。

第7回 あたりまえの生活を実質的に 保障する



こしの かずゆき / 1964年生まれ、奈良教育大学教授。専門は障害児教育学。全国障害者問題研究会委員長。著書に『子どもからはじめる算数—すべての子どもに学ぶ喜びを』（共著）（全障研出版部、2017年）など。

奈良教育大学 越野和之

障害児教育の専門性を考える

障害児教育をめぐる近年のキーワードの一つは「ニーズ」ということです。1970年代後半のイギリスにおける特殊教育改革のキーワードであった（特別な／教育的）「ニーズ」ということは、2000年代になると、「二人ひとりのニーズを把握し、適切な指導と必要な支援を行う特別支援教育へ」といわれるように、わが国の「特殊教育」改革のキーワードにもなりました。

「特別な教育的ニーズ」という概念は、従来の「特殊教育」制度の問題点を検討する上では一定の分析力をもつ有効な概念です。しかし、それを転じて「教師のしごととは子どものニーズに応えること」と規定してしまうと、大切ななにかがこぼれ落ちてしまうように思えます。「ニーズに応える支援」をモザイクのように貼り合わせれば、それで子どもたちの発達を保障することができますのでしょうか。

こんな発言を耳にしたこともあります。「盲学校の専門性は触察と点字、歩行訓練、ろう学校の専門性は手話あるいは口話と日本語の獲得、肢体不自由養護学校では各種機能訓練、病弱養護学校では病識の形成…。しかし知的障害児教育では、これらに対応するような内容が明確でなく、専門性が確立していないのではないか」。

列挙されていることは、いずれも大切な内容ですし、それぞれの学校の固有性を端的に表すものでもあるでしょう。けれども、これらこそが障害児教育の専門性だと言ってしまうてよいでしょうか。あるいは、それを反映させて、知的障害児教育における専門性の欠如を論難することに妥当性はあるのでしょうか。

幼児期は輝かしい時代

大阪市盲の幼稚部に長く勤務された今井さんは、「子どもたちにとっての幼児期」は『新しいこととの出会いの連続』といってもいい輝かしい時代」と述べた後、次のように記しています。

「視覚に障害を持っている子どもたちも同じです。視覚に障害があっても、新しいことにたくさん出会い、それを体いっぱい、心いっぱい受けとめ、『何でも知りたい。何でもやってみたい』、そんな意欲にあふれた生活を子どもたちとともに幼稚部でつくっていきたくて考えて、日々実践に取り組んできました」（越野・青木道忠編、今井理知子・大前俊夫・藤田幹彦著『特別支援学校と障害児教育の専門性』クリエイティブかもがわ2006年）。

同校幼稚部の保育カリキュラムには、自由遊び、音楽・リズム、絵本・お話遊び、お散歩、リトミック、素材遊び、生活自立にむけた身辺自立のとりくみと、一見、通常の幼児教育と変わらない活動が並んでいます。しかし、この「なんの変哲もない」ように見える活動を、視覚に障害のある子どもたちにしっかりと手渡すために、今井さんたちは日々の保育のありようをじつていねいに吟味してきたのです。「お散歩」の一場面を紹介